

(三) 次の甲・乙を読んで、あとの問いに答えよ。

【甲】次の文章は、鎌倉時代に成立した『沙石集』に収められた一説話である。これを読んで、あとの問いに答えよ。

中比、甲斐国に嚴融房といふ学生ありけり。修行者多く給仕奉事仕て、学問しけり。あまりに腹のあしき上人にて、修行者ども、時、非時、さばかり荷用するに、湯の熱きも、又ぬるきも叱り、遅きをも腹立て、とく持て来れば、「法師に物食はせじとするか」とて、食ひさしてうち置きて叱りけり。そのあはひを見むとて、障子のひまより覗けば、「あれは何を見るぞ」とていよいよ腹立しければ、常には心よからずのみありけれども、よき学生なりければ、忍びてこそ学問しけれ。

妹の女房、最愛の一子に遅れて、人の親の習ひといひながら、あながちに嘆きければ、よその人も訪ひ哀れみけるに、この上人訪はざりける事を、「あら I や。これほどの歎きを上人の訪はれぬよ。よその人だにも情けをかくるに」といひければ、弟子の中に聞きて、「かの女房の恨み申され候ふなるに、御訪ひ候へ」といへば、例の腹立して、「無下の女房かな。法師が妹なんといはん者は、普通の在家の人に似るべからず。生老病死の国にをりながら、II の愁ひなかるべしと思ひけるか。あら不覚や。いひかひなき女房かな。いでいで行きて、つめふせて来む」とて、かさかさとして行きぬ。「実にや、わ女房の歎きを訪はぬと恨み給ふなるは」といへば、「あまりの歎きに、心もあられぬままに、さる事も申してもや候ひけん」といへば、「無下の人かな。さすがこの法師が親しきしるしには、世の常の人にや似給ふべき。生ある者必ず滅す。会者は定めて離るる、南浮は本より III の国なり。前後の相違、母子の別れ、世になき事か。始めて歎き驚くべきにあらず。かへすがへすいひかひなし」と、叱りければ、「形のごとく、その道理は承りて侍れども、身をわけて出で来、なつて候ひつる上、心さまもかひかひしく候ひつれば、何の道理も忘れて、ただ別れのみ悲しく覺え候ふ」とて、涙もかきあへず歎きければ、「あら愚痴や。道理を知りながら、なほ歎くべきか。されば、それは知りたるかひか。不覚や」とて、いよいよ責めふせけり。

さて、かの女房、涙を押しのごひて、「そもそも人の腹立ち候ふ事は、あしき事か、又苦しからぬ事か」といへば、「それは貧臘痴の三毒とて、宗との煩惱の一なり。疑ひにや及ぶ。恐ろしき過なり」といふ時、「などさらば、それほど御心得のあるに、御腹はあまりにあしきぞ」といふに、はたとつまりて、いひやりたる事はなくして、「よしござらばいかにも思ふさまに歎き給へ」とて、叱りて出でにけり。まことにつまりてぞ聞えける。

物の理を知ると、知るがごとく行ずるは、道異なり。されば過を知りて、過をあらため、理を弁へて、理をみだらざるは、実の賢人智者なるべし。多聞広学なれども、身の過をあらためず、心のひがみ直さずは、いたづらに他の宝を数ふるに似たり。されば七種の聖財の中に、智者と多聞とは別なり。学生の才覚あるも、いかでか知れるがごとく行ぜむ。行ぜむ智者といふは、広く物を知らざれども、道理を弁へて知れるがごとく、IV を恐れ V を心得て、心明らかに悟りあるをいふなり。如実の行は、多聞よりおこるとて、多聞は実智を生ずる因縁とはなるなり。

或る俗いはいく、「智恵なく愚痴なる在俗の、不当不善なるは、さるべきことなり。多聞広学なる僧の中に、心得ぬ事ども<sup>ホ</sup>の見聞え候ふは、何を習ひ知り給へる、かひこそなけれ」と申ししをば、この道理をもて、「VI と VII とは異なり。されば書にいはく、「知る事のかたきにはあらず。よくする事のかたきなり」といへり。

「まず世間に弓箭を取る人、合戦の場に名をも惜しまず、命をも捨てず、逃げ隠れ、怖ぢふためくは、口惜しき恥とは知りて侍るか」といふに、「いかでか知らぬ者候ふべき」と答ふ。「さて、この事知れる人は、人ごとに心も剛なるや」といふに、「さる人は希なり」といふ時、「されば世間の事は無始より慣れ来て、名利をも思ひ、恥辱弁へて、かけくみ打ち合ひ、身を忘れ命を捨てむ事は、多生に慣れ来たる事にて、よにやすかるべき道に、な

ほ心たけきは希に、不覚なるは多し、まして仏法はその道高く、その理かすかなり。学びがたく、まどひやすし。知る事なほたやすからず、行ずる事いよいよかたし。無始より今に知らずして、今日はじめてあへり。希にも信じ行ずることありがたけれ。仏の心を知つて、仏の行を学ぶ、いかでかたやすからむ。我が身にやすき世間の事を、知るままになす事のかたきをもて、仏法の習ひがたく、行じがたき事を推して、学者をそしるべからず」と申ししかば、道理にをれ侍りき。かの上人、この道理を弁へずして、なかなか在家の人につまりけり。妹は

Ⅷ は劣り、Ⅸ は勝りて、返つてつめてけるにこそ。

(注) 時・非時：正午以前の食事と正午以後の本来食事をしてはならない時の食事。

南浮：南閩浮堤の略。仏教で須弥山の南方海上にあると考えられた大陸。人間の住む世界。

問十八 傍線部1「常には心よからずのみありけれども、よき学生なりければ、忍びてこそ学問しけれ」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 修行者たちはいつも不愉快だったが、心根の良い学生たちだったので、真剣に学問を学んでいた。
- ロ 修行者たちはいつも不愉快だったが、巖融坊が心根の良い学僧だったので、静かに学問を学んでいた。
- ハ 巖融坊はいつも不愉快だったが、優れた学僧だったので、修行者たちはがまんして学問を学んでいた。
- ニ 巖融坊はいつも不愉快だったが、心根は良い学僧だったので、修行者たちは内密に学問を学んでいた。
- ホ 巖融坊はいつも不愉快だったが、優れた学僧だったので、巖融坊はその気持ちを抑えて学問を学んでいた。

問十九 空欄Ⅰに入る語として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ うたて      ロ あはれ      ハ いとし      ニ かしこ      ホ むざん

問二十 波線イ〜ホのうち、一つだけ文法的な用法が異なるものがある。それはどれか。最も適切なものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

問二十一 空欄Ⅱ・Ⅲに入る語として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、解答欄にマークせよ。

- |     |        |        |        |        |        |
|-----|--------|--------|--------|--------|--------|
| 空欄Ⅱ | イ 怨憎会苦 | ロ 求不得苦 | ハ 輪廻転生 | ニ 愛別離苦 | ホ 一期一会 |
| 空欄Ⅲ | イ 無常迅速 | ロ 老少不定 | ハ 四苦八苦 | ニ 怨親平等 | ホ 盛者必衰 |

問二十二 傍線部2「離るる」・傍線部4「怖ぢ」の活用型はそれぞれ何か。最も適切なものを次の中から一つずつ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 四段活用      ロ 上一段活用      ハ 上二段活用      ニ 下一段活用      ホ 下二段活用

【乙】次に示すのは『史記』卷四「周本紀」において、蘇厲が周君に強大化する秦の侵攻をかわす方策を進言したことばである。その發言中に現れる「養由基」は、問題文【甲】の二重傍線部にいう「弓箭を取る人」として、中国史に名高い人物である。これを読んで、あとの問いに答えよ。なお、設問の都合上、返り点・送り仮名を省略した箇所がある。

秦破<sup>リ</sup>韓・魏、<sup>ナ</sup>扑<sup>シ</sup>師武、北<sup>ノ</sup>取<sup>リ</sup>趙、蘭・離石者、皆白起也。是善<sup>ク</sup>用<sup>レ</sup>兵、又<sup>リ</sup>有<sup>リ</sup>天命。今又<sup>ヒ</sup>將<sup>レ</sup>兵、出<sup>テ</sup>塞、攻<sup>ム</sup>梁。梁破、則<sup>チ</sup>周危<sup>カ</sup>矣。<sup>A</sup>君何不<sup>レ</sup>令人説白起乎。曰、「楚<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>養由基<sup>トイフ</sup>者。善<sup>ク</sup>射<sup>ル</sup>者也。去<sup>ル</sup>柳葉<sup>ニ</sup>百步<sup>ニシテ</sup>而射<sup>レ</sup>之、百發<sup>シテ</sup>而百中<sup>レ</sup>之。左<sup>ノ</sup>右<sup>ノ</sup>觀者<sup>ニ</sup>數千人、皆曰、「善<sup>ク</sup>射」。有<sup>リ</sup>一夫<sup>ニ</sup>立<sup>チ</sup>其旁、曰、「善<sup>ク</sup>、可<sup>レ</sup>教<sup>ル</sup>射矣」。養由基怒、<sup>リ</sup>拑<sup>リ</sup>弓、<sup>ヲ</sup>撻<sup>リ</sup>劍、曰、「客<sup>ニ</sup>安能<sup>ク</sup>教我射乎」。客曰、「非<sup>ズ</sup>吾能<sup>ク</sup>教<sup>ル</sup>子<sup>ニ</sup>支<sup>カ</sup>左<sup>ノ</sup>誦<sup>ヲ</sup>右<sup>ノ</sup>也。夫<sup>レ</sup>去<sup>ル</sup>柳葉<sup>ニ</sup>百步<sup>ニシテ</sup>而射<sup>レ</sup>之、百發<sup>シテ</sup>而百中<sup>レ</sup>之、不<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>善息<sup>トシ</sup>、少<sup>シ</sup>焉<sup>シ</sup>氣衰力倦<sup>ウ</sup>。弓撥<sup>レ</sup>矢鉤、<sup>D</sup>一發<sup>シテ</sup>不<sup>レ</sup>中<sup>ル</sup>者、百發<sup>シテ</sup>盡<sup>ル</sup>息」。今破<sup>リ</sup>韓・魏、<sup>ナ</sup>扑<sup>シ</sup>師武、北<sup>ノ</sup>取<sup>リ</sup>趙、蘭・離石者、<sup>E</sup>公之功多<sup>シ</sup>矣。今又<sup>ヒ</sup>將<sup>レ</sup>兵出<sup>テ</sup>塞、過<sup>リ</sup>兩周、<sup>F</sup>倍<sup>シ</sup>韓、攻<sup>ム</sup>梁。一挙<sup>シテ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>、前功<sup>ク</sup>尽<sup>ル</sup>棄。公不<sup>レ</sup>如<sup>ク</sup>稱病而無<sup>レ</sup>出」。』

(注) 蘇厲：遊説家蘇秦の弟。 周君：周の君。

秦・韓・魏・趙・梁・周：国名。

師武：魏の將軍。 蘭・離石……地名。

白起……秦の將軍。 兩周……東周と西周。

問二十九 傍線部A「君何不令人説白起乎」とあるが、蘇厲がこう提言したのはどのような戦況分析に基づくものか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 天命をかしこむ秦王が自ら梁の要塞を撃てば梁は敗北して、危険が周に迫る。
- ロ 蘇厲とともに白起が自ら戦陣に立つて梁を打ち破つても、周は危険に曝される。
- ハ 敵将である白起が軍を率いて梁に攻撃をかけ梁が敗れたならば、周が危うくなる。
- ニ 秦の将兵が要塞を出て戦う梁を攻撃して梁が破られたならば、周の国が危険になる。
- ホ 蘇厲が周の軍を率いて梁に出撃し梁を破り得たにしても、周の国の危険は避けがたい。

問二十三 傍線部3「疑ひにや及ぶ」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 疑うに越したことはない。
- ロ 疑いを持つにいたる。
- ハ 疑ってみたい。
- ニ 疑いの余地はない。
- ホ 疑ってみるべきだ。

問二十四 空欄Ⅳ・Ⅴに入る語として最も適切なものを次の中から一つずつ選び、解答欄にマーク

せよ。

- イ 行
- ロ 理
- ハ 宝
- ニ 知
- ホ 過
- ヘ 身

問二十五 空欄Ⅵ・Ⅶに入る語として最も適切なものを次の中から一つずつ選び、解答欄にマーク

せよ。

- イ 実
- ロ 善
- ハ 知
- ニ 俗
- ホ 僧
- ヘ 行

問二十六 空欄Ⅷ・Ⅸに入る語として最も適切なものを次の中から一つずつ選び、解答欄にマーク

せよ。

- イ 智恵
- ロ 愚痴
- ハ 不覚
- ニ 名利
- ホ 多聞
- ヘ 恥辱

問二十七 本文の内容として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 弓矢をとる武士は合戦に出て、いつでも死ぬ覚悟ができてから、実践であたふたすることはない。これはすぐれた法師と共通する心の持ちようである。

ロ 道理をわきまえて道理を教えられる人を賢者という。そのような賢者となるのが仏教の最終的な目標であり、巖融坊はその境地には達していなかった。

ハ 巖融坊は真の仏教の修行者でなかったために、人の情愛を理解できなかった。妹に子供との死別を受け入れるように迫ったのは、仏教の教えとは異なっている。

ニ 仏教はその教義を日常的に実践することの方が困難である。従って、教義をたくさん学んだほうが仏教を究める上では近道といえる。

ホ 知識があっても実行が伴わないことは、仏教だけの問題ではない。しかし、深遠な教義を持つ仏教では、特にそのような弊害に陥りがちである。

問二十八 次の中で、鎌倉時代の成立ではない説話集はどれか。一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 宇治拾遺物語
- ロ 古事談
- ハ 日本霊異記
- ニ 古今著聞集
- ホ 十訓抄

問三十 傍線部B「客安能教我射乎」には、養由基のいかなる思いがうかがえるか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 百発百中の技量を全く認められず、嘲笑された不快感。
- ロ 百発百中の技量ながら、それを理解されないもどかしさ。
- ハ 百発百中の技量を披露した上で、指導を拒まれた不愉快さ。
- ニ 百発百中の技量を認められながら、射撃の欠点を直された不満。
- ホ 百発百中の技量にもかかわらず、射撃を教えるといわれての憤懣<sup>ま</sup>。

問三十一 傍線部C「不以善息」は「善いところで息<sup>や</sup>めておかなければ」という意味である。この意味に沿った返り点として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 不<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>善息
- ロ 不<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>善息
- ハ 不<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>善息
- ニ 不<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>善息
- ホ 不<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>善息

問三十二 傍線部D「一発不中者、百発尽息」はどのような意味か。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 一発射はずしたならば、百発射る意味はない。
- ロ 一発でも射はずせば、百発百中の評価は潰<sup>つぶ</sup>える。
- ハ 一発射はずだけで、百発打つ気力はそがれる。
- ニ 一発射はずせば、百中するまで息を抜けなくなる。
- ホ 一発でも射はずした者は、百発を射ることはできない。

問三十三 傍線部E「公」は誰を指すか。最も適切なものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 蘇厲
- ロ 周君
- ハ 白起
- ニ 養由基
- ホ 師武

問三十四 傍線部F「不如称病而無出」はどのような内容を説いたものか。その解釈として最も適切なものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 出兵を請われても、病気を口実にして出陣しないのがよい。
- ロ 戦功を褒められても、病気を口実にして出兵を断るのがよい。
- ハ 引見を命ぜられても、病気を口実にして命令を退けるのがよい。
- ニ 対面を求められても、病気を口実にして対応しないのがよい。
- ホ 戦況を問われても、病気を口実にして分析を断るのがよい。